

市民フォーラム 登壇者資料①

「誰もが集う広島に向けた交通まちづくりの取り組み」

広島都心会議

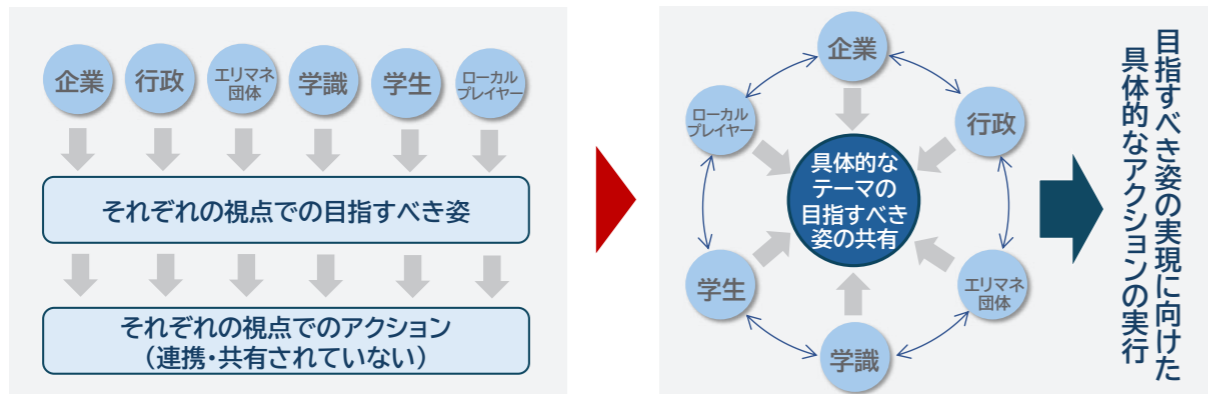
広島電鉄(株)
諏訪 正浩

広島都心会議の目指すまちづくり



競争 から 共創 へ

まちの課題が多様化する中で、地方都市においては、一極集中のまちづくりや、官民がバラバラで行うまちづくりではなく、**地域固有の現状や課題、目指すべき姿を産官学民の様々な関係者が共有し、その課題の解決に向けて関係者それぞれの強みを生かしながら継続的にまちづくりを推進する「共創」のまちづくりが求められる。**



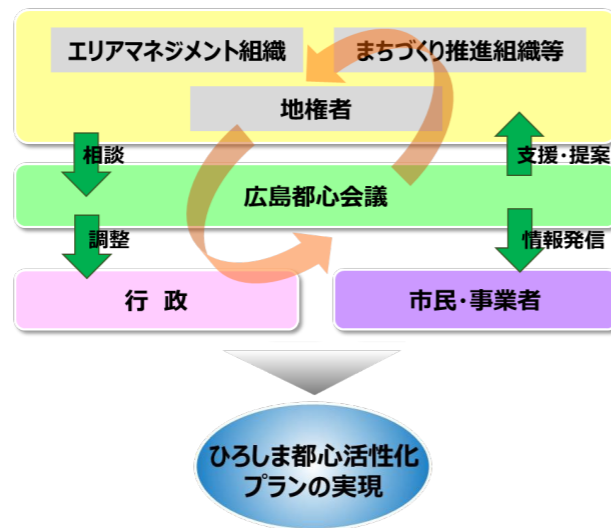
1

広島都心会議の役割



産官学民が目指すべき方向性を共有しながら連携して都心活性化を推進するための**”補助エンジン”**

- 産官学民の中間組織として、それぞれの立場の意見を聞きそれらを踏まえた目指すべき姿を考え・共有するとともにその実現に向けた具体的な活動を連携しながら実行に移す
- エリマネ団体や若者などが、まちの課題や課題解決に向けて取り組んでいる活動が積極的に進むための支援を行う



2

広島都心会議のまちづくりの実践活動



広島都心の目指すべき姿の共有とその実現に向けたアクション	広島都心のまちづくりの場づくり	広島都心の新たな価値の創造
広島都心会議ミライビジョン2030 広島都心全体の具体的な目指すべきまちの姿を示した中期的ビジョンを官民連携で作成 	若者がまちについて考える場 正会員企業の若手社員や県内の大学生などが広島の魅力や都心活性化に繋がる方策について議論 	エリマネサポート制度 エリアマネジメント団体の活動推進につなげるため資金等の支援を行う制度を整備
ワーキンググループ(10テーマ) 都心活性化のために必要なテーマを設定し課題や課題解決のための具体的施策を官民連携で検討 	広島都心会議SHOWROOM 誰もが使えるまちづくりのイベント、交流、情報発信拠点となる場所を整備 	CITY SCAPE ! 個別で開催していた都心部でのエリマネ団体や企業、市民の都心活性化の取り組みを同日に開催

目指すべき姿の実現に向けた具体的なアクションを**民間、行政、学生、エリマネ団体など 色々な人が一体となって実施**

3

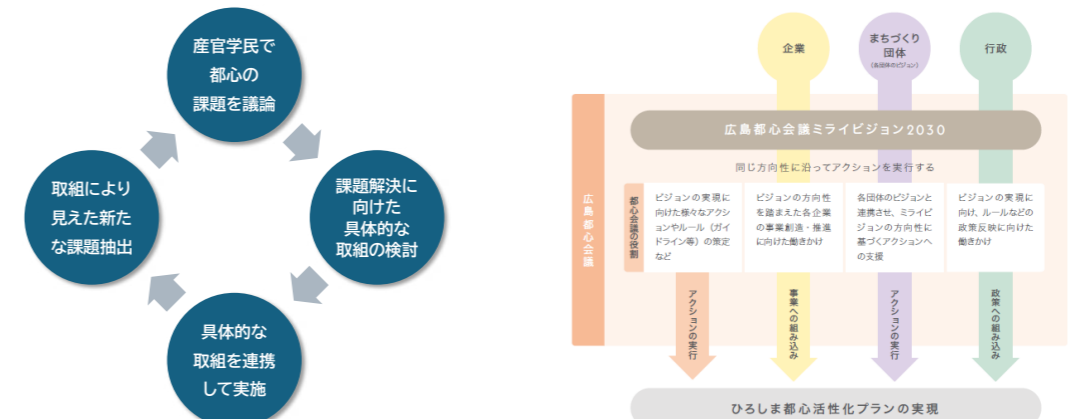
広島都心会議の今後と目指すべき姿



産官学民が都心の課題を共に考え、共有するとともに、その解決に繋がる**具体的なアクションを連携してスタートで実施**することで、課題解決につなげていく動きが起これ始めている。

今後も、まちづくりに関わる企業や行政・まちづくり団体等が**顔が見える関係性を築き**

同じ方向性に沿って都心活性化に向けたアクションを実行していく



4

エリアプラットフォーム・カミハチキテルの取り組みについて

株式会社 サンポール
若江 祐輝、松見 朱音

1. カミハチキテルとは

カミハチキテルは民間企業を中心に、行政、大学など、広島都心に関わる様々な団体が参画する官民連携の紙屋町・八丁堀地区のまちづくりプラットフォームである。2024年4月には、同地区とJR広島駅を結ぶ相生通りの相生橋から稲荷大橋の約1.5キロの区間を車中心ではなく「人のための空間にしたい」という思いから、一般の自動車乗り入れを制限し、歩行者と路面電車などの公共交通機関のみが通行できる、公園のように整備する「トランジットパーク構想」についての提言書を広島市に提出した。

年々参画企業も増加しているため、提言書等に基づいて『都市空間・都市基盤』、『コンテンツ』、『交通・モビリティ』とワーキンググループに分かれて各方面から課題解決に取り組んでいる。

交通・モビリティワーキンググループ(以下:交通WG)は教育機関の専門教授をはじめ、道路・交通系コンサル、公共交通事業者、設計事務所、商業施設、弊社のようなメーカーの参画企業で構成されている。相生通のトランジットパーク化を実現するために交通のあるべき姿や解決すべき課題について、データ等を用いて議論を行い、社会実験などの実践も行っている。

2. 昨年度の取組: 体験したいことを議論

昨年度のカミハチキテル全体の取組として、相生通で体験したい具体的なアクティビティに着目した議論を行った。結果、遊びや食事・休息・仕事など相生通で体験したいアクティビティは多種多様で、トランジットパーク化により新たな価値・文化の創出が期待されていることや、各WGにて回遊性を高めるための課題が判明した。



PLACE社作成のパス図

3. 昨年度の取組: 交通のあるべき姿を議論

交通WGでは、回遊性を高めるための環境整備として、相生通の主役である路面電車とは別に路線バスでも都心を循環できるようにすることや、シェアサイクル等スモールモビリティとの融合が必要と考えた。また、パークアンドライド等、自動車交通とうまく共存していくことや待合空間の整備も必要と考えた。これらは、周辺エリアと一体となって他WGなどとも連携して考えていく必要がある。

4. 今年度の取組1: カミハチバスタ化

バスまつりとCITY SCAPE

昨年度の議論を基に、バス停の待合空間の整備を社会実験として実施した。

現在、相生通のバス停は数や系統がかなり多く、行先がわかりにくい課題がある。しかしバス停の集約もすぐに実現できる問題ではないため、今できる取り組みとして、分散しているバス停はそのままにして、行き先に応じた電停・バス停の案内を分かりやすくし、空きスペースを活用して、カミハチ全体を1つのバスターミナルと捉えてバス待ち空間の創出を図った。

11月に行われたバスまつりとCITY SCAPEにおいて、バス停が近くにあるトゥモロースクエアや賀茂鶴オアシスをバス待ち空間の候補とした。ファニチャーを設置したり、イベントを実施したり、ベンチ付きのシェアサイクルのポートを設置したりした。



イベントではキッチンカー(コーヒー屋)に出店してもらい、実際に、バス停で待っている人がコーヒーを買い、ベンチに座ってバスを待つなどの使われ方が見られた。



賀茂鶴オアシスではコンテンツWGと連携し、日本酒の試飲や演奏会等を行った。

シェアサイクルのポートは、「ただの自転車ポートではなくベンチやプランター付きのファニチャーを置いてみるのはいかがでしょうか」という意見が上がり、製作に至った。ドコモ・シェアバイクの協力のもと、実証期間中にはレンタル可能の状態にしたため、ファニチャーポートからのシェアサイクルの貸出や返却も見られた。

イベント期間中、「立ち寄りたくなる・憩える空間」がカミハチのどこにほしいかというアンケート調査も実施した。結果として、トゥモロースクエア以外のバス停の周辺にも多くのニーズがあることや、

社会実験を通してバス停のすぐそばにバス待ち空間があることの重要性和ポテンシャルの高さを伺うことができた。

5. 今年度の取組2: カミハチパス

もう一つの取組として、公共交通フリーパスであるカミハチパスを1ヶ月間実証実験で試行した。

内容としては、今あるシティパスというデルタ内を基本とするエリアの1ヶ月フリー乗車券をそのまま生かし、そのパスをカミハチパスと称した。

選出したカミハチメンバー100名に1か月間使ってもらうことで、エリアへの立ち寄り数増加や自動車等からの移動手段転換に寄与するかなど行動変容を検証することを目的としている。公共交通の1日乗車券や無料デーの取組は、全国で行われているが、1ヶ月フリー乗車券を配布する実証実験を行ったのは、おそらく全国初ではないかと思われる。

行動変容の検証は、デイリー、ウィークリー、事後の3つのアンケートによる把握によって行った。

アンケートの結果、パスによって行動が起きた・行動範囲が広がったという意見が3割を占めた。

具体的に挙げられたアンケートの感想・意見では「距離や乗車料金で遠慮していた場所に気軽に行けた」結果、カミハチエリアの魅力やバスの経路地や経路に気付けたという回答が多く集まった。

カミハチメンバーによる実験であったため、ポジティブな行動・意見が多く見られる傾向にあったが、外出機会の創出や外出範囲が広がり、自然と公共交通に乗りたいと思う人の増加などの、いわゆる新たな需要の創出に繋がり、かなりの期待が持てる取組となった。

6. 今後の取組

これまでの社会実験によって得たデータを基に、今後どうしていくか議論を通して、「交通のあるべき姿」をさらにブラッシュアップしていく。

市民フォーラム 登壇者資料③

「誰もが集う広島に向けた交通まちづくりの取り組み」

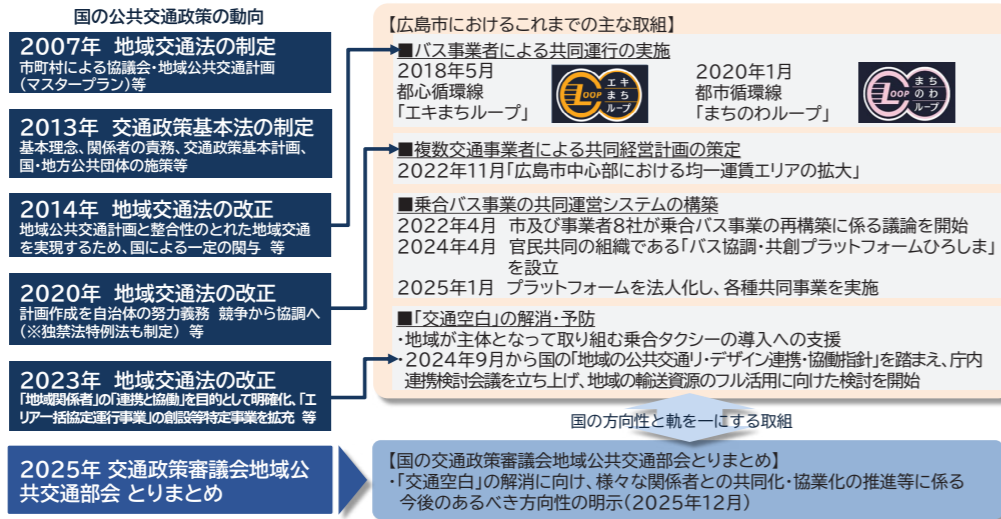
広島市取組紹介

広島市
三浦 潤也

広島市における地域交通における課題と取組状況



本市では、これまで国の公共交通政策の動向と連動させながら、官民の継続的な協関係の下で、公共交通の機能強化や、バス路線の再編を進めてきたが、依然として公共交通を取り巻く状況は厳しいものとなっている。このため、広域経済圏のヒト・モノの「循環」と地域の住民の「活動」を直接支える公共交通を、道路と同様に「社会インフラ」と捉えた上で、利用者の利便性を重視した「広島型公共交通システム」を構築することとし、まずは、極めて厳しい経営状況となっている乗合バス事業をモデルケースとした取組を進めている。



1

乗合バス事業の共同運営システムの概要



本市とバス事業者8社で構成する「(一社)バス協調・共創プラットフォームひろしま」が中心となり、「質の高いバスサービスの提供」と「バスネットワークの最適化とそれを支える持続可能なインフラ整備」に重点を置いた施策を強力に推進



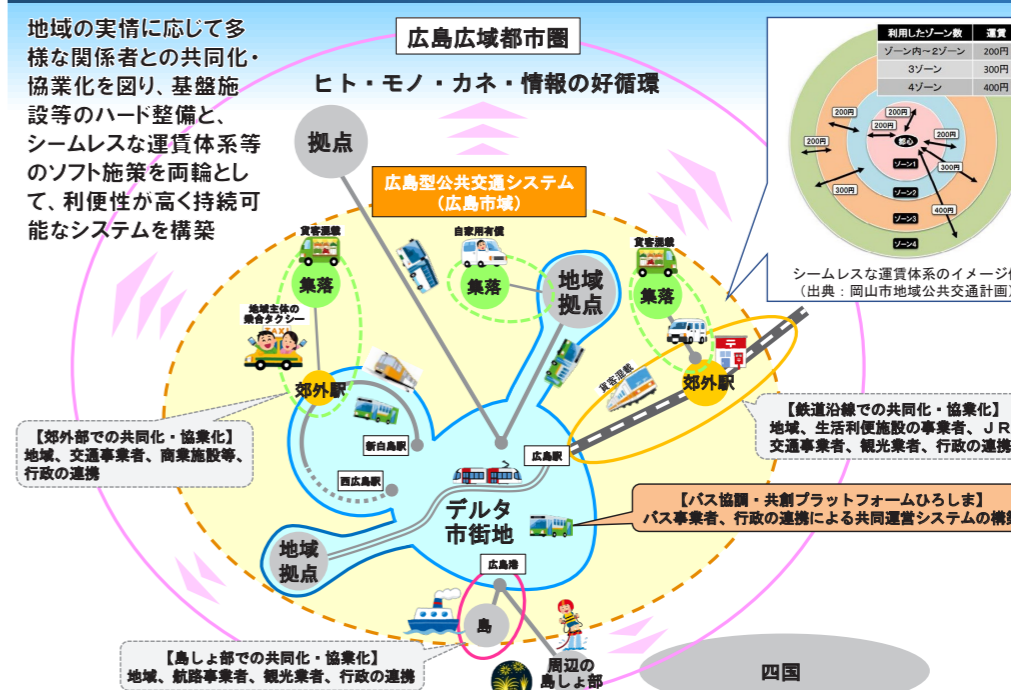
2

「交通空白」を解消・予防するための共同化・協業化の推進



3

【参考】広島型公共交通システムの全体像



4

取材の現場から—多様な移動がもたらす「生き方」の選択

フリーアナウンサー
藤井 尚子

1. 都心軸の再定義：混ざり合う空間への転換
「働く場所」から「生きる場所」へ

広島最大級の東西軸(広島駅～相生通り～紙屋町・八丁堀)は、今、大きな転換期にあります。これまで都市の中心部(ダウンタウン)は、「効率よく働くための場所」でした。しかし今、私たちが向き合っているのは、そこが「生きる場所・集う場所」へと進化していく姿です。特定の誰かのための場所ではなく、若者も高齢者も、観光客も地元の生活者も、多様な人々が自然に「混ざり合う」こと。その豊かな混ざり合いを支えているのが、実は「移動」の多様性なのだ、日々の取材を通じて確信しています。

2. コミュニティメディアは「心を運ぶ乗り物」

私が20歳から携わってきたCATVやコミュニティFMは、単なる放送局ではありません。災害時の命綱であり、地域の物語を紡ぐ「コミュニティの伴走者」です。公共交通という「ハード」に、地域の物語という「ソフト」を乗せることで、移動は豊かな体験へと深化(しんか)します。

例えば、ハワイでレンタカーを走らせる時。ローカルラジオから流れる小気味よい早口の英語のおしゃべりと音楽に触れた瞬間、「今、私はハワイにいる!」という旅の昂揚感に包まれます。また、宮島まで向かうわずか10分間のフェリー。近年では観光ガイドのアナウンスに菅田将暉さんや、Adoさんといった時代を彩るスターたちが登場するなど、思わず耳を傾けたいくなる面白い試みだと思っています。



スタジオにて

もし、JR芸備線の車窓に黄金色の稲穂が広がる瞬間、スマートフォンから「その田んぼの農家さんの声」や「案山子をつくる子どもたちの声」が流れてきたらどうでしょうか。GPSと連動し、景色に合わせて沿線の伝統文化や暮らしの背景を届ける——そこはもう「動く美術館」です。車窓から見える風景に、その土地ならではの「音」や「情報」が重なったとき、移動は「心躍る体験」に変わります。

私のラジオ番組はそんなイメージで作っています。以前、リスナーのおばあさんから「家から出るのが

しんどい時も、あなたのラジオを聴いているだけであっちこっち行けて楽しいわね」というお声を頂いて、乗り物だけが人を運ぶのではなく、コミュニティメディアは「心を運ぶ乗り物」の役割も果たせるのだと気が付いたのです。

3. 「移動」そのものを楽しむライフスタイルの提案

35歳の時に働き方を変えました。私の日常は「移動が基本」です。車、JR、路面電車、バス、そして高速船やフェリー、時には飛行機もパズルのように組み合わせます。マルチモーダルな働き方の実践です。広島・廿日市エリアには、日常に溶け込んだ多様なモビリティがあるからこそ、この軽やかなライフスタイルが叶うのです。屋久島への仕事には2時間に到着できる一方で、県内や国内の北方面へのアクセスには課題を感じることもあります。

最近インタビューした方々の中に、皆さまにご紹介したい2つの記事があります。よろしければ、廿日市市と廿日市商工会議所などが運営するサイト「今こそ廿日市」に寄稿した次の記事をあわせてご検索頂きましてご覧下さい。



夜のJR芸備線車内にて

一つは、宮島を拠点に広がる新しい旅の形です。宮島に長期滞在し、広島市の原爆ドーム、大竹市の下瀬美術館、岩国市の錦帯橋を旅行するお客様が増えているそうです。広島県は温暖な瀬戸内沿岸側と、スキー場があり、神楽や稲作などが見られる中山間地域側とでは、人の営みも食文化も異なる魅力があります。点在する魅力を公共交通でつなぐことで、私たちは地域を「点」ではなく「面」で味わうことができます。

メニューの8割を広島県産の食材で提供している「ホテル宮島別荘」の石岡支配人兼総料理長は、宮島の文化と広島県の食の魅力を融合させたローカルガストロノミーツアーを提供したいと語っています。

もう一つは、地域の日常や生活風景をアトラクションに変える、宮浜温泉の事業者が中心となって結成した「宮浜アドベンチャーズ」の試みです。地域資源

を五感で楽しむアドベンチャーリズムを提供しています。例えば、瀬戸の夕陽や牡蠣いかだを眺めながら「いかだ型船上レストラン」で新鮮な牡蠣を味わうというように、宮浜の皆さんの当たり前の日常を特別な体験に変えることで、観光客だけでなく、移住を考える方々の心をも惹きつけています。

4. 景観と文化を守る「公共交通×食・アート」が創る
広島の回遊スタイル

灘(兵庫)、伏見(京都)と並ぶ「日本三大酒どころ」と称される広島において、「飲むなら乗る」というポジティブな選択を支えているのが公共交通です。「飲むなら乗る」が安心して自由なまち歩きを可能にし、地域を元気にするのです。

広島・廿日市エリアでは、「アート」を目的にした新しい移動の形も生まれています。2年に1度、ゴールドデンウィークに開催される「Hiroshima Art Galleries Week (HAGW)」では、2025年度は広島市、廿日市市、安芸太田町の20もの会場で展覧会やツアーが催されました。特筆すべきは、美術館とギャラリーが連携し、まち歩きと美術鑑賞を融合させ、公共交通を介して会場を巡る「回遊型」のモデルを提示したことです。



「HAGW」のギャラリーツアーで基町を散策!

全国でもこのようなアートと地域、建築と地域とを融合させたプロジェクトは増えています。芸術はスポーツと同様に国内外から人々を惹きつけ、公共交通・宿泊・観光を動かす強力なコンテンツです。8月6日の広島平和記念日、「ひろしまアニメーションシーズン」や「広島国際映画祭」など、広島には世界中からアーティストや芸術文化に関わる人たちが集います。私が参画しているプロジェクト「1Future」もその一つです。ルポ「Hiroshima」で知られる米国人ジャーナリスト、ジョン・ハーシーさんの孫、キャノン・ハーシーさんが発起人を務め、坂本龍一さんのドキュメンタリーを手掛けたスティーブン・ノムラ・シブル監督らと共に、度々広島に集まり、映画製作や現代アート展などを通じて広島の記憶を未来へ繋ごうとしています。

こうした国際的なプロジェクトに携わる中で痛感するのは、広島を訪れる人々にとって「移動」こそが、その街の第一印象を決める大切な体験だということです。私は広島市の都心部と豊かな表情を持つ県内各地が、



「1Future」の仲間と!

「食」や「アート」という目的地でシームレスに結ばれる未来を願っていますし、二次交通が整い、移動そのものが楽しめる仕掛けがあちこちにあふれることを期待しています。

5. 結びに代えて：究極の移動目的は
「人に会いに行くこと」

公共交通は単なる「手段」ではなく、文化に触れるための「パートナー」です。多様な移動手段が確保されているということは、私たちが自分らしい豊かな「生き方」を自由に選択できる社会であることに他なりません。

「全日本お米グランプリ北広島町」や「はつかいち苺の祭典2026」、「芸備線を考えよう、楽しもう〜六角精児バンドライブin備後西城」といった、地域に根ざしたイベントに携わりながら実感したのは、公共交通が維持されることで「人と人が出会う機会」が守られるという事実です。



広島県の中山間地域にある「三良坂フロマージュ」の山地酪農

鉄道やバスという「足」を守ることは、その車窓から見える「田んぼや祭りのある風景」そのものを守ること。そして、そこに生きる人々の営みを守ることでもあります。「お米」「お酒」「アート」といった目的地に行く理由(コンテンツ)を公共交通とセットで提示し、利用を促す仕組みを作る。その仕掛けの先にある私の一番のおすすめは、何よりも「人に会いに行く」ことです。



下瀬美術館を取材

6. 提言：移動の質を「人」でデザインする

これからの交通まちづくりには、正確な時刻表や効率的なルート整備といった利便性だけでなく、それらを動かす「動機」のデザインが不可欠です。人口減少社会において、公共交通を維持・発展させる真の動力源は、移動の先にある「ストーリー(物語)」です。

訪れた先で「誰に出会えるか」「どんな体験が待っているか」。自治体や事業者の皆様には、ハードの整備と並行して、地域で輝く「人」を核とした「移動の質」を高める施策をお願いいたします。「あの人に会いに行こう」という純粋な動機こそが、公共交通を動かす最も持続可能なエネルギーになります。想像してみてください。

県外から、あるいは世界から、ヒューッと、軽やかに、誰かが「あなた」に会いにくるのです。乗り物にのって。